

岡地文子全集

第十四卷

田
地
文
子
全
集

第
十
四
卷

新 潮 社



第十五回配本(全十六卷)

円地文子全集 第十四卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年十一月十五日 印刷
昭和五十三年十一月二十日 発行

著 者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京(〇三)二六六―五一
編集部 東京(〇三)二六六―五四

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集 第十四卷 目次

〔戯曲〕

女 詩 人

偽 詩 人

変 化 女 房

八 尋 白 鳥

源氏物語葵の巻

〔中篇小説〕

木 下 長 嘯 子

125

90

77

58

27

9

〈短篇小説〉

花 方

い の ち

歌のふるさと

花 光 物語

ますらを

〈隨筆〉

『女人風土記』

解題

304

205

196

183

174

168

157

円地文子全集 第十四卷

戲
曲

女詩人

魚玄機

李億（子安とも言う）

温庭筠（飛卿） 詩人

清新

李娃

魚母

胡姬、西域の商人、圭童、侍女、侍童

その他

晩唐の時代（平安朝初期）。

長安郊外の瀾橋に近い林亭。

廻廊のある瀟洒とした建物、上手に紗の帷を垂れた窓のある
化粧の間が見える。欄に近く燈籠をかけ、中央に卓、椅子、
階下の庭に牡丹さかりに咲く、庭にも小卓、二、三の陶のスト
ール。晩春の空重く霞んで暮れなずむこと……

一

春の夕暮れ。

長安の花柳界で一流の名妓、李娃と清新、欄によって、李娃
は阮咸を遊びながら話している。

李娃（絃をまさぐりつつ歌う）

百舌花もずに問う 花語らず

さまよいて 岸辺を行けば

柳の糸の 春を恨むや

うまく絃に乘らないわ。

清新 いいじゃないの、余情があつて……それ温先生の詩？

李娃 ええ、玄機さんが二、三日前温先生から頂いて来たのよ。是を今夜の会までに節づけて先生に歌つて上げてくれて頼まれたんだけど、温先生の詩は音がよくつて、歌つていてもたのしいけど、作曲するには難かしいわ。
清新 もう一度歌つて御覧なさい。拍子をとるから……

李娃、阮咸をかき鳴らし、美しい声で唱歌する。

圭童（少年）が恭々しく贈りものを捧げて入つて来る。二人を見て礼をする。

圭童 李の若旦那さまからお使いにまいりました。魚玄機さまは在宅でございますか。

清新 玄機さんはいまお風呂に入っていますけど（にっこりして）何か御用？

圭童 はい、珍しい雲母のスカーフ（被^ふ子）とエメラルド（秘^ひ秘）の簪が手に入りましたので、今晚の宴会におつけ下さるようにと若旦那様から仰せつかりました。（品物を捧げる）

李娃 それはまあまあ、恐入りました……魚のお母さん、李の旦那からお使いですよ。

はいはいという声。俵のように肥えた、魚母（玄機の母で置き屋の女将）よちよち奥から出て来る。

魚母 おお、圭童さんか……度々御苦労さま……今日は何をいただいたんですえ？

清新 エメラルドの簪に雲母のスカーフですつて……さぞ見事でしょうねえ。

李娃 羨しいわ！

魚母 李の若旦那は眼がお高いから、どれも皆私の好みにぴったり合うつて玄機がいつもいっていますよ。（包みをあける）おやまあ、何という薄いスカーフでしょう。七色に光つていて、天女の羽衣のようだ！

李娃 素晴らしいわ、それにこの簪の緑の溶けるような色。
清新 晴れた日に澄んだ深い水の底をのぞき込んだような光ですわ。玄機さん、さぞ喜ぶでしょうねえ。

魚母 ええ、もうそりゃ、あんた喜ぶどころか……（少婢が茶と菓子を持って来る）お前さん遠慮せずにお上り……（言いながら清新と李娃に目配せする。二人背く）

清新 そう言えば圭童さん、李億さんの奥さまがお里へお帰りなされたというの本当ですか。

圭童 ええ……いいえ。

李娃 あら、おかしい。隠さないでもいいじゃありません

か。平康房の花柳界じゃもう皆知っているのに……

魚母 これこれお前さん達、李の旦那の御家内のことなど（わざと大仰に手をふって）お聞きするもんじゃない……いけない、いけない……（奥へ行く、実は立ち聞きしている）

清新と李娃声を揃えてなまめかしく笑い、欄を降りて圭童の傍へ来る。

李娃 ねえ、どうしたの、若旦那が玄機さんを長安のうちからここへ連れて来て囲ったことが知れたの？

清新 李さんの奥さんのお里は大そうなお金持ちなのでしよう。

圭童 いいえ、財産じゃ旦那の家の方がずっと……

李娃 ああ、そうだったの……（うなずく）奥さまは美しい方？

圭童 怖い方です。こここの玄機さまが牡丹の花なら、うちの奥さまは栗のいがみたいです。

李娃 まあ……

圭童 奥さまは玄機さまのことをよく訊きますよ。そうしてその度にお金をくれます。

清新（何げなく指さして）お前さん、そのお菓子の下を御覧なさい。

圭童 あ！（金を手にとり肩をすくめる）

李娃 奥さまは玄機さんのこと怒っていらっしやるんですよ。

圭童 僕は見たことはないけど、怒っている声は始終ききました。毎日毎日キーキー騒いで猿のようでしたよ。一昨日お里へ行きました。今日は髯のこんなに長い奥さまのお父さんが大旦那のところへ来て、僕の出で来るまで帰りませんでした。

清新（李娃と顔を見合す）

圭童 玄機さまに暇を出せとかけ合っているのだと女中達が話していました。奥さんのお父さんはうちの店の商売の取締りをするお役人の偉方なので大旦那も頭が上らないんです。何だっておれに相談なしに芸者でもない女など囲ったと怒っているさるそうです。

清新（李娃に）やっぱりねえ……

李娃 やっぱり、だから……（といって奥を見ると魚母と眼が合う）ねえ、圭童さん、お前さん帰ったら若旦那に玄機さんは大喜びでしたっていうのよ。簪を（頭へ手をやり）こういう風に髷にさして、スカーフを肩にかけて何とも言えず綺麗でしたって。

圭童 そんなこと僕なんかいうと若旦那は怒りますよ。この頃は神経質になっていて、嘘なんて一言でばれてしまふんです。昔から頭が鋭くて、あれでは馬鹿になって、商売をするには向かないって大旦那は言ってたんですが、

玄機さんがここへ来てからひどくなりました。家にいても寢室にばかり籠っていて、そうかと思うと突然馬をひき出して曲江のあたりまで突っ走らせて見たり、……ああ、又晩くなると叱られる……（急にかしこまって）では御免下さいまし。

清新 ありがたい……又、何か新しいことがあったら教えてね。

圭童去る。二人上へ上る。魚母は出て来る。

李娃 お母さん、やっぱり想像した通りですね。

清新 荒れ模様だわ。

魚母 大方こんなこととは思っていたが……それほど思わなかったよ。（溜息して坐る）

お前さん達は私の懇意な色町の人の中でも、小さい時からうちの玄機を妹のように思っておくれだから、今日も実は相談しようと思つてわざわざここまで来て貰ったんだよ。ね、親身になって考えておくれ。私はこの年までこんな困ったことはないんだよ。

清新 お母さんの御心配はよくわかっていますわ。

李娃 でも奥さんの方もなかなか大変ね。

魚母 そりゃね、奥さんの方は玄機が李億さんの世話になる時からどうでこんな騒ぎは晩かれ早かれ一度は起ると覚悟していたことなのさ。しかし、この方は私の長年の

経験でいうと、李億さんぐらいの器量のある男があのかうい血道をあげていれば、すったもんだはあったにしても、結局は奥さんの方が折れるにきまっているよ。あのかうい男を妾が一人出来たぐらいでむざむざ捨てて行かれるものかね。

李娃 そりゃそうだわ。私たちの世話をしてくれる人だって、事と品は変つても大抵こういう騒ぎがあつて、かえつて雨降つて地固まつていますものね。

魚母 そうとも。（大きくうなづく）

女童が緋鯉の鉢を持って舞台を横切つて行く。

清新 ああ、その緋鯉どうするの？

女童 御湯殿の横の急な流れへ放すのでございます。（去る）

魚母 あれが玄機の指図なんだよ。湯の中に浸つて緋鯉が流れを下つてゆくのを見ているとたのしいというんだがねえ。（苦笑する）

李娃 玄機さんは詩人だから……

魚母 詩人！ 女詩人！ ああもう私や心臓がとまりそうだよ。こんなことになるくらいならあの娘がどんなに好きでも詩なんぞ決して習わせるんじゃないかな……大体あの師匠の温という詩人が変りすぎているよ。

李娃 でもね、十二、三の時からあんな立派な詩の作れる女

の子なんてこの長安のどこを探したっていませんもの……

清新 温先生は進士の試験場で八度手を掛けば八韻の詩が出来ると噂されるほどの天才でしょう。その先生が玄機さんの詩の才能をほめて、男だったら自分を凌ぐとおっしゃったそうじゃありませんか。

李娃 そりやお母さん、私達の行くお座敷でも魚の娘の玄機の詩といえ、一流の方達が騒ぎしていらっしやいますもの……

清新 それにあの眩しいほどの美しさ……私、玄機さんには一体どんな男の人なら釣合うのかとよく思ってたわ。

李娃 あんまり完全に美しいということは、かえって色事では欠点なのね。玄機さんのような女には怖くて近よれないといった男の人を私ほんとうに知っていますよ。

魚母 王族の方や大金持ちであの子を手に入れたいと申込んだ方は幾人あったか知れないけれど、玄機は詩を二、三度やりとりすると無造作に返事をしなくなってしまうんだものね。あの娘がどんな時でも履を脱がせかねないばかりにして迎えるのは温先生だけだよ。あの变りももの酒癖の悪い四十男に、玄機があの上深はまりしては大変だと、私やどれほど気を揉んだことが。

清新、李娃 まさか……（笑う）

魚母 いいえ、本当のことよ。だからあの李億さんが温さ

んのところ、玄機の詩を見て感心したといっただわね。逢いに見えた時、玄機もはじめて満足した様子なので、まあ、どんなにうれしかったか……それが今になって、こんな思いをするなんて……

李娃 玄機さんだって、この瀾橋の林亭へ来る時にはいいそしていましたのね……

清新（つと立上って）お母さん、玄機さんがなみの女でないなんてことはありません。それは私も李娃さんもうけ合いますわ。

魚母 そりや私だって、女だもの……娘の身体のことぐらい……でも李さんもよくなればこそ、そこまでうちあけて仰有るのだから……何となく様子が変だとは思っていたが……昨日李さんからうちあけられて、私や腰のぬけるほどびっくりしたよ。玄機ときたら平気で遠乗りに出たりして、憎らしいったらない……

李娃 それがお母さん、いまの圭童の話だと、李の若旦那も時々狂人みたいに馬を乗りまわすんですって……二人とも焦れているのね、これは……

清新 おかしいわね。玄機さんが李億さんを嫌っているというなら別だけれども……

李娃 いいえ、玄機さんはあの方が好きよ。はじめて逢った時、ぽおと頬をあかくした様子が白い花に灯がうつったように美しかったわ。

清新 李億さんも意気地がないわね。やっぱり怖いのかしら……

魚母 だって、お前さん、独身じゃなし奥さんもある歴とした紳士じゃないの……たかが芸者屋の娘の玄機ぐらい……ね、お前さん達は色の諸わけも知った人達だからこそ頼むんだよ。何とか二人の仲が普通の男と女になるように知恵を貸しておくれ。

李娃 お母さんの困っているのを見ると何とかして上げたいけれど……

清新 あ、いいことがあるわ。ともかく二人が仲よくなればいいでしょう。今宵は、宴会で胡姬の舞があるといったわね。

李娃 ええ、そうよ。西域の商人も香料や絹を持ってついで来るそうよ。

清新 ああ、それ、その商人よ。眼の青いペルシャ人の商人、お母さん。(耳に口をよせる)

魚母 しっ！(化粧室の方を指す) 玄機がそこへ来たよ。

二人階を降り魚母を手招く。三人一塊りになり、李娃は阮咸をかるく鳴らしつつ私語する。

魚母 うん、その薬で……そうすることが出来ればねえ。

清新 使いをやりましょう。それなら必ず大丈夫ですわ。

(三人去る)

紗の窓にはんまり燈火の影がうつる。横向きに鏡に向っている玄機の姿が見える。一人の侍女が髪をかき上げ、一人は団扇で風を送っている。玄機は肌をくつるげ化粧している……ちよつとの間でやがて窓を閉じる。あたりにだんだん夕闇が濃くなる。庭へ李億(二十五、六歳の美貌の青年、稍々やつれた眼の険しくなった顔)と、温庭筠(飛卿、四十歳前後、敝衣破帽、何か強烈な意志が肉体に余って沈静していられないような挙動、酒に荒れすぎんだ顔)

李 温先生、少しここで休みましょう。玄機のいないところで話したいことがあります。

温 君達の愛の巢を見るのははじめてだ。ほお、なかなか瀟洒な家だね。しかし、魚玄機を飼う籠とすれば貧しいね。あの女は君、神の傑作だ。あれを入れるのには帝王の宮殿でも立派すぎはしないよ。

李 (うしろをみて) 瀾橋の堤に楊柳の花が雪のように霞んでみえる夕べの景色……あれも玄機に適い(ふき)ませんか。

温 (凝とみやって) 美しいが嫺々としている。玄機の美しさは廬山のように高くて強い……あれの詩もそういう趣きだと思わないか。

女童が通りすぎようとして主人を見とめる。李は眼でしらせ、